

に其人の畫業のみを標準とするよりも寧ろ社會的活動性によつて左右され易いもので、最近代作家に對する評價はかくの如き展觀を繰返しては純粹に作品の上に立つ批判が常に新しく加へられることによつて更改されることが必須である

書 評

大維德所藏中國陶瓷圖錄

蒲 霍 孫 著

A Catalogue of Chinese Pottery and Porcelain in the Collection of Sir Percival David.
By R.L. Hobson

現に大英博物館の陶器及土俗部々長の地位にある著者ホブソン氏は、既に十指に餘る東洋陶瓷、特に支那陶瓷の各時代に互る論著を公にし、その都度該博なる知見と豊富なる資料に依り、未だ科學的研究の日尙淺き斯界を啓發するところ尠くなかつたが、此度復同氏に依り豫てより渴望されてゐたデーヴィッド卿(倫敦在住)所藏にかゝる支那陶瓷蒐集品の圖錄が刊行されるに至つたことは、東洋陶瓷に關心を有する者の齊しく欣快とするところであらう。

本圖錄の内容は、故宮博物院長馬氏の筆にかゝるデーヴィッド卿の卷頭言に始り、以下ホブソン氏の序文、緒論、關係年表、圖版並に解説、引用文獻目錄、陶器款識表補遺、及び全卷總索引に終つてゐる。

本圖錄の主眼たる圖版總數百八十葉には、所藏品中より二百二十九點の支那陶瓷器が收録され、その過半数以上の百三十九葉は極めて精巧なる原色刷を以てし、よく原品の佛を髣髴たらしめてゐる。單に此優秀なる圖版のみを以てしても、本圖錄は此種出版中、先づ第一に指を屈せらるべきものであるが、茲に收録せられたる品物を略時代に依つて大別すると、宋代或は元初とされるものが總數の四割強を占め、此に亞いで明代とされるもの八十數點、清代とされる

といふことである。今一々の作家品目を擧げるの煩を避けるが、かくの如き意味に於て見直し考へ直すべきものゝ多きを思つてこの貴重なる機會を與へられた當事者の勞に深謝するものである。(正木)

もの約三十點、元代數點となり、此他に周代と稱されてゐる繩文土器一點が加へられてゐる。本圖錄に收録された各器の時代鑑別に關しては著者ホブソン氏の最も苦心を要した點と想はれ、同氏が永年に互る廣汎なる見聞と、それに伴ふ研鑽の跡が隨所に認められ、總じて同氏の下せる推定年代は現在の支那陶瓷研究段階に於ては最も妥當性に富むものと思惟されるが、勿論暫定的なるものも尠からず認められ、此點、今後の研究に俟つべき餘地を多分に存してゐる。

デーヴィッド卿の支那陶瓷蒐集を他の個人蒐集に比較する時、顯著な二三の卓越性が認められる。その第一は、蒐集品の核心が、支那窯業史を通じて藝術的に最高潮に達し、而かも比較的遺品に乏しき宋窯に置かれてゐることである。これは同卿所藏品中の明窯及び清窯その他の品質、價值を輕視する意味では決してないが、今日その一品すら得難き宋窯を、古來特に宋の六窯として尊重され來つた汝窯、官窯、哥窯、龍泉窯、定窯及び均窯の各種に互るのみならず、その他建窯及び青磁の數窯を網羅せる本蒐集の如きは、最近大英博物館の有に歸せりと傳へられる彼のユーモルフォプロス氏藏支那陶瓷器と並んで、歐米に於ける斯界の双壁と稱すべきものである。第二に特筆すべき點は、卿の蒐集品が、總體的に傳來を明確にする優品に富むことである。例へば、序文中に指摘されてゐる如く、本蒐集中には少くとも七十點以上の前清朝御物を包含し、此等は主として清朝没落後、その遺寶の少からざる部分が歐米銀行へ擔保とされ、後轉じて其有に歸した際、當時上海に在り且香港上海銀行の樞要の地位にあつた卿が直接又は間接に入手されたものゝ由であるが、かゝる清朝歴代遺寶の外

に、歐米に於ける著名蒐集家、英のアレキサンダー氏、獨のワイスマン氏、米の故ド・フ・レスト氏等の舊藏せしものも少くないが、特に吾人の注目に値するものとしては、前酒井伯藏龍泉窯青瓷花瓶（東山名物の一たりしもの）、及び同家にあつて黒田侯所藏のものとして並稱されてゐた龍泉窯飛青瓷花瓶、或は根津家の龍泉窯青瓷龍耳香爐、高砂手魚耳花瓶及び金欄手茶碗の如く、特に吾國に於て傳統的に尊重されてゐたものを始めとして、其他川崎、淺見、廣岡、光村、守屋其他の諸家の如き知名收藏家の舊有に屬せしものが少からず散見するに反し、端方其他支那の個人收藏家の舊有たりしものは比較的少數なることである。これは傳來を極めて尊重する卿の蒐集意圖を自ら明示してゐると見られる。この傳來尊重といふ卿の主義は次に擧げんとする第三の特徴として表はれ、卿の蒐集の尊重すべき獨自性を最も顯著ならしめてゐる。それは卿の收藏品は銘記、紀年及び窯號を有するものに富む點に於て個人蒐集中、その最高位を占めてゐることである。特に乾隆御題の詩銘を有するもの二十點を算するに至つては、個人蒐集中これに匹敵すべきものは無いであらう。而かも其等の品が大部分傳來を明かにする清朝舊藏のものたる點に於て、又其等の中、周代土器一、明代宣德瓷の霽紅釉及び霽青釉碗各一を除く十七點が何れも乾隆帝に依つて宋窯と鑑せられてゐる點に、其傳來的價值と興味が倍加されてゐる。乾隆御題詩銘を有するもの以外にも、「定州公用」（圖版九一）或は「會稽」（圖版九五）等の銘ある定窯白瓷の如く、前者は定窯と概稱され來つたものゝ中、唯一の地名を有するものとして、又後者は古來青瓷風のものゝみの產地として知られたる越州の一地名なるが故に、越窯に於ける白瓷燒成の有無に關し新に問題提起するものとして、夫々興味深き例であるが、此他にも龍泉窯青瓷花瓶（圖版五一）に見られる長き銘文の如きは、著者が特記してゐる如く、從來知られざりし元代に於ける龍泉窯史に輝かしき一頁を添加するものと云ふべきであるが、總數の約半數を占むる在銘品中には、尙此等の外にも幾多の貴重なる資料を提供すべきものは論を俟たない。

書

評

各圖版には詳細なる客觀的記述が附せられ、法量は品物の形狀に依り高さ或は口徑と重量が誌されてゐる外に、各圖版の右下隅に殆ど目立たぬ程度に實大と圖版との大きさの比例が $\frac{1}{3}$ 又は $\frac{1}{4}$ 等と誌されてゐる。傳來は確實なるものゝみを明記し、銘記の多くは加筆されてはゐるが、總て原文を掲げ、之に英譯を附し、乾隆御題の如きは總て乾隆御製詩集に依つて其出典を附記し、各器に類品ある場合は参照を擧げ、尙脚註を附せるものも尠くない。總じて、簡にして要を得てゐるが、望蜀の難を云へば、圖版の掲載法が稍々鑑賞的に偏してゐることである。一例を擧げれば、數年前中尾萬三氏が杭州窯跡調査の際に發見された「河濱遺寶」の印文ある陶片と同印文を有し且つ之と同種の青瓷らしく考へられる浙江青瓷皿（圖版三七）の如きは、或は鑑賞的價值には乏しくとも、研究的價值よりすれば當然原色刷として然るべきであらう。

緒論に就いては、著者自身が、單に本圖錄に掲載されたものに關する必要な總括的説明を主眼としたと云つてゐる如く、纏つた史的敘述では勿論ないが、本圖錄の最も重要な特色の一つをなしてゐる幾多の銘文、款識等に關しての簡潔なる論證が、各窯或は時代に分ちて行はれ、特に乾隆帝の鑑識眼に就いては、帝が題詩中に表明されたものを、文獻と實物の兩面より比較、吟味して興味深き著者の創見が窺はれるが、又他方に於ては、著者が從來支持してゐたユーモルフ・ブロス氏の影青説、即ち影青瓷は汝窯系のものなりとする説を、本圖錄中に汝窯と斷定せる作品を論據として、遂に修正したるが如き點も認められ、又暫定的とは云へ、官窯と哥窯の識別法を述べ、後者の釉は全面に微細なる氣泡が充ちてゐるのに反し、前者の釉は全然氣泡を止めざるか、或は氣泡を有するとも、其表面が微に破れてゐるかの何れかであり、斯かる氣泡の相違に依つて肉眼には極めて酷似せる官、哥二窯の大部分が識別しうるとし、現に本圖錄の官窯及び哥窯なるものゝ中には此方法にのみ依つて分類されてゐると思はれるものもあり、今遽に違ひ兼ねるが、其所説の當否は暫く措き、著者が斯くの如く從來の所説を或は訂正し、或は新説の提唱を仄見せしめてゐる等の點

に於て、此緒論も亦尠からぬ問題を提出してゐる。

最後に、全巻を通觀して最も感銘の深いことは、所藏者の高雅なる趣味と犀利なる鑑識が一貫して透徹してゐることであるが、本圖錄編纂の骨子をなす資料の蒐集に當つても、其大半が所藏者自身の手依つて丹念に行はれたる由で、所藏者としての斯かる眞摯なる態度には大いに敬意を表し度い。本圖錄の如きは有ゆる點より觀て英國の印刷術の最善を盡せるものといふべく、その善美を凝せる外装と圖版の優秀、記述の懇切なるは、著者を同じくする彼のユーモル・フォロス氏藏東洋陶器圖錄と並んで近來公にされた歐文東洋陶器圖錄中の壓卷と稱すべきであらう。(石澤)

洋装堅四一冊(一尺三寸五分)幅三二・五(一尺七分)全一冊 序文及緒論等四〇頁
本文一九〇頁 圖版一八〇葉 六五〇部限定版 一九三四年六月五日倫敦スタートン印刷社發行 定價一二磅一二志。

法隆寺の諸問題

夢殿第十二冊特輯

法隆寺建立年代に關する論争は、近年又繰返されて學界の關心事となりつゝある。雜誌夢殿の特輯號として法隆寺の諸問題を纂輯した本書は、此の問題に大部分の紙面を充て、諸家の見を紹介した。喜田貞吉氏は「法隆寺再建非再建論の回顧」に歴史的な此の論戰の経緯を記述して再び強く其の立場を主張し、濱田青陵氏は「法隆寺論争」我觀で中立的な立場から比較的穩當な意見を述べて居られる。全く濱田氏も云はれる如く此の兩論は立脚地を異にするものであるから、同じ論争が繰返されることは無意味である。

近年會津八一氏によつて提出された新說に論議が集中されることは自然で、其の推古十五年焼失說には不同意の意見のみが見えてゐる。足立康氏「法隆寺推古天皇十五年焼失の疑」は之に對する否定論であり、田中重久氏「法隆寺建立年代論の再吟味」では會津氏の所說を駁すると同時に、蘇我馬子再建說――

從つて現在の金堂は馬子歿年なる推古卅四年迄とする新說を提起された。此の論には當然天智紀の記述を否定し推古卅四年以前に於ける焼失を想定するのであるが、此の問題に就ては庚午の罹災を推古十八年のことと見ると云ふのみで論述は無い。尤も自ら實物論をとると云はれるから其の部分は從來說かれた非再建論に従はれるのであらう。

其の他に上田三平氏「法隆寺再検討の考古學的資料」の記述があり、昨年來の修理工事による新發見物の檢分の結果をも報じて居られるが、無論正式の調査報告ではないし結論を持つものでもない。その他、福山敏男氏「法隆寺流記資財帳の研究」及び「法輪寺の建立に關する疑問」、佐伯啓造氏編の著者別「法隆寺建立年代文獻目錄」等が收められ、第二部門として同寺に關聯を持つ歴史上の諸研究がある。(青山)

菊判和裝 本文二六六頁 焼付寫眞一葉 アート刷圖版二三葉 昭和九年十二月十日鶯故郷舎發行 定價二圓五〇錢。

日本古樂面

昨年十月十六日より十一月七日に互つて、東京帝室博物館は秋季特別展覽會として、我國古樂面の展觀を行ひ、廣く朝野の清鑒に供した。

我美術研究所に於ても、是を機として例月の美術懇話會を博物館に催して之を參觀し、同館々員野間清六氏の講演を聴き、又本誌第卅六號に同展覽會出陳品目を擧げて紹介した。

此度、表題の如き圖錄の出版を見るに至つたが、斯くの如き多數の古面を一堂に蒐めて大觀する機會は容易に恵まれないところであり、此の機會を逸した同好者にとつても、亦研究者にとつても、此の圖錄が公刊されて其の全貌を一書の裡に學び得るのは喜ばしいことである。

本圖錄は帝室博物館の監修に成り同展覽會の出陳點數二百點に餘る内、その